



# 大岡昇平全集

第十卷

大岡昇平全集 第十卷

定価 三五〇〇円

昭和四十九年十月十五日 印刷

昭和四十九年十月二十五日 発行

著者 大岡昇平

発行者 高梨 茂

印刷者 山田 博

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一

電話(五六一)五九二一

振替東京三四

〒104 検印廃止

©一九七四

大岡昇平全集  
第十卷  
目次

評 伝

中原中也

I

中原中也伝——搖籃

II 『朝の歌』

京都における二人の詩人

離 合

富永の死、その前後

友 情

「朝の歌」

思 想

片 恋

「白痴群」

Ⅲ 『在りし日の歌』

「在りし日の歌」

在りし日、幼なかりし日

Ⅳ 『中原中也全集』解説

詩 I

詩 II

評論・小説

日記・書簡

翻訳

V

中原中也・1

あとがき

富永太郎

富永太郎伝

富永太郎

書簡を通して見た生涯と作品

編集についてのノート

年譜

明治三十四年（一九〇一）

——大正十年（一九二一）

大正十一年（一九二二）

大正十二年（一九二三）

大正十三年（一九二四）

大正十四年（一九二五）

あとかぎ  
書簡索引  
解題

池田純溢

475 472 470



評

伝



中  
原  
中  
也



## 中原中也伝——搖籃

昭和二十二年一月の或る朝、私は山口線湯田の駅に降りた。小郡で満員の山陽線を捨て、支線の列車が緩やかに樺野川（たがの）の小さな谷に入って行くにつれ、私は名状しがたい歓喜を覚えた。それは不眠に疲れた私の眼に、窓外の朝の光の中を移る美しい谷間の景色の与える効果であったか、それとも亡友中原中也（なかのなか）の故郷の家を見るのが、あと一時間に迫ったという期待から来る興奮であったか、私にはわからなかった。

私がこれから訪ねようとする家は、この友が生きていた間は訪れようとはしなかった家である。東京から山口までの距離は別としても、中原と私との交友は、そもそも互いに過去を気にかけるという性質のものではなかった。我々は二十歳の頃東京で識り合った文学上の友達であった。我々はもっぱ

ら未来をいかに生き、いかに書くかを論じていた。そして最後に私が彼に反いたのは、彼が私に自分と同じように不幸になれと命じたからであった。

私も私で忙しいことがあるつもりであった。もっとも何のために忙しいか、中原が何のために自分が不幸であるかを知っていたほどには知らなかったのであるが——そして彼の死後十年たった今日、私に彼の不幸の詳細を知りたいという願いを起させ、私をこうして本州の西の涯まで駆るものが何であるか、それも私はよくは知らないのである。

しかし私も四十を過ぎて、自分を知らないことがあまり気にかからなくなった。例えば前線で死に直面しながら、私は絶えず呟いた。「未だ生を知らず。いづくんぞ死を知らんや」。

こういう不安定の心掛で、私が戦場をくぐり抜けて来られたとすれば、どうして現在平穩な市民生活をそれでやって行けないことがある。あとはすべて思想の贅沢である。

私の疑問は次のように要約されるであろう。——中原の不幸は果して人間という存在の根本的条件に根柢を持っているか。いい換えれば、人間は誰でも中原のように不幸にならないければならないものであるか。おそらく答えは否定的であろうが、それなら彼の不幸な詩が、今日これほど人々の共感を喚び醒すのは何故であるか。しかし読者は私が急に結論を出すとは思わないで戴きたい。……

湯田は現在山口市に包括され、戸数五百を出ない小さな町である。微量の銹分を含んだ温泉が湧き、隣接の旧山口市及び周防灘沿岸の工業都市から来る湯治客を待つ小遊興地を形づくっている。

駅前から人家疎らな畑中の道の二丁ばかり西へ行くと早くも温泉旅館の並ぶ一廓に突当る。通行人に訊くとすぐわかった。その一廓の右へ迂回して少し行ったところに、私は容易に中原病院の看板を見出すことができた。

中原家は中世の祖父の代からこの地に外科医を開業していた。昭和三年父君謙助氏の没後、長男中也に家業を継ぐ意志がなかったため、以来病院は他に貸していたが、私の行った時は次々弟呉郎君が成長して末弟拾郎君と共に経営に當って

おられた。

病院は低い生垣の向うの前庭に疎らに庭木を配した、むしろ殺風景な木造平家の洋館である。これに中原病院ではなく「農事試験場」の看板が懸つていても私はさして驚かなかつたであろう。それほどこの建物の正面は、普通の医院の入口の持つ威厳も愛嬌も具えていなかった。惟うにもと軍医であった父君謙助氏は、その病院を市民的虚飾で飾る必要を認められなかつたのである。こうして投げやりな無難作な外観も私には何となく中原にふさわしいように思われた。

出迎えられた医学士呉郎君の風貌も簡単な初対面の挨拶中、別に際立った印象がある筈がない。私はただ私の抱いている中原の幻影の奇怪さに比べて、こうしてかつて中原の踏んだ沓脱を単なる遠来の客として踏み、彼と血を同じくする人物と極めて平凡な会話を交えるのに幾分てれていたにすぎない。しかしそれから広い縁側を伝って通された母屋の内部には、ちょっと私を驚かせた豊かさがあつた。高い天井、大きな建具、その他普通「木口」と呼ばれる日本家屋の内部の一般的な印象には、こうした田舎の古い家らしい目立たぬ豪華があつて、それは中原が東京で送っていたゆとりのない生活と奇妙な対照をなしていた。そういえば中原には何処か地主風の鷹揚さがあつたのに、私は改めて思い当つたが、しかし私は彼の魂に固有かも知れぬ気高さを、環境を知つたばかりにそこ

から帰納したがる伝記作者の食欲を戒めねばならぬ。

やがて六十五、六の小柄な美しい老婆が現われた。母福さんである。謙助氏の亡くなられた後、中也をはじめ四人の男子の教育を遂げられた苦心と緊張の名残は、その物静かな举止にも窺われる。昭和十二年の秋中也の告別式の時、鎌倉でお目にかかり初対面ではなかったが、私はその顔を見忘れていた。

次弟思郎君はしかし憶えていた。お通夜の晩涙を払って便所から出て来られた姿が眼に残っていたからである。

「私共から見て、兄がこれほど皆さんに集まっていたたくような人とは思われぬ」とその時いわれた。中原は東京生活のために中原家の現金財産をほとんど蕩尽していたのである。

思郎君は京大の法科を出られてから某工業会社に勤務せられていたが、任地京城で終戦に会い、今は妻子と共に郷里に帰っておられる。この人が中原家の当主である。

なお中原の次子愛雅は彼の死の翌年死亡、未亡人孝子さんも数年前再縁されて、現在中原家には中也の直接の遺族は、一人も残っていない。

中也の写真が出された。告別式の時棺の前を飾り、創元社版『中原中也詩集』の巻頭に載せられた、あの無帽背広の半身像である。

十年振りで見ると中原の顔は、かつて棺の前で私を打ったと

同じくらい強く私を打った。私の彼に対する考えは変わった。

生涯を自分自身であるという一事に賭けてしまった人の姿がここにある。常にその決意と力の意識を通して、自己にも他にも向けていた厳しい眼を今撮影室の壁間に移し、諦念を以て世間の前に置き続けたと同じ姿勢を、そのままレンズに曝しているのである。

いかにも不幸な人であったが、この不幸は他の同情を拒んでいる。まして伝記作者の売文的同情なぞは――

あゝ、おまへはなにをして来たのだと……

私はかつて中原が故郷の風から聞いたと同じ声をこの写真から聞くように思った。私の青春に決定的な影響を与えたこの友に心で反いて以来幾年、たいていは穏やかでなかった我がの交友の記録に対する悔恨、或いはそのために、無為と怠惰の裡に過ぎた歳月に対する悔恨なくしては、私はこの亡友の伝記の筆を取らなかつたであらう。

中原家に厄介になった三日間、大袈裟に言えば私は一種の夢遊状態にあったといえよう。私は私の心を黙らせるために、できるだけ伝記作者の冷静と細心を課し、執拗に家族の方々に迫って、中也の生い立ちの詳細を問いたしたが、今手許のノートを見て、今更その内容の貧困と粗雑に驚いている。

伝記作者としての私の未熟を別として、結局は私の中の感傷的原因から、私はただうかうかと彼の育った家の空気を吸ってすごしたにすぎなかつたらしい。

例えば十五歳の中也が、所謂「思想匡正」のために九州の或る真宗の寺に遣られて帰ってからは、しばらくは廊下を歩く時も便所へ入る時も「なんまいだぶ、なんまいだぶ」を唱えていたという話を聞いてからは、私は廊下に絶えず彼の聲音（体重の関係で成人しても子供のようひそやかだった彼の聲音）を聞くように思いながら、帰郷すると彼のいつも坐ったという奥八畳の間に坐り続けただけであった。

しかし、この最初の宗教的目醒めについて、中原自身はかなり違った話を私に伝えていた。彼によれば彼がこの寺にやられて得るところがあったのは、ただ親鸞の「ひとを千人殺してんや」という逆説を知っただけであった。彼がその時私に教えた親鸞の人と信仰に関する解釈は、家人の伝える素朴な熱狂とかかなり逡巡があり、これもたしかに一問題であるが、たぶん私はこの郷里訪問記ではここまで触れることはできないであらう。

中原がこの寺に送られたのは、大正十一年中学三年の夏休みと冬休みの二回であった。当時彼の家を寄寓していた山口高校生村重某の紹介によったが、今家人は寺が大分県にあり、住職を「トウヨウエンジョウ」と呼んだというほか、所在地

も寺号も忘れておられる。大正末期、キリスト教の複雑な教義に対抗するため、『歎異抄』の新解釈を掲げた一派の道場ではなかつたかと思われるが、今私は詳しく考える材料を合せていない。

中原中也是明治四十年四月二十九日現在の中原家で生れた。謙助氏三十二歳福さん二十九歳の最初の子である。当時謙助氏は旅順衛戍病院附軍医として任地にあり、同十一月福さんは夫に中也を見せるため海を渡る。

結婚後七年或いは子無きを憂えておられた矢先とて、両親の喜びは一方ではない。かつ幼少よりすこぶる利発の子であったので、その養育にもひとしお心を注がれた。そのため或いはああいり驕慢な子ができたのではないか、と母福さんは謙遜しておられる。一方中也是父が彼を愛するあまり、遊蕩的な湯田の環境を教育に悪いとして外で遊ぶことを禁じ、また溺死を懸念して水泳を習わせなかつたこと等について父を怨んでいた。子に満足される教育を与えるということは、そもそも親という位置からは不可能らしい。

しかし中原はこの父について多く懐しきをもって語った。彼がよく話した一つの挿話があるが、それによると或る時父が病気で離室に寝ていた時、母屋で制止をきかずに弟と騒いでいる彼を、父は裸足で中庭の敷石伝いに叱りに来たが、そ



の手には一枚のハンケチが握られていて、父はそれで子供たちを打って帰って行ったそうである。

彼によれば父の厳格さは内心の優しさを隠す仮面なのであった。

謙助氏は明治三十三年柏村氏から入って中原家の女婿となられた人である。山口県厚狭郡厚東村棚井の農家の産。年少にして東京に出、済生学舎を経て軍医学校に学び、軍医として各地を歴履、少佐に昇ったが、大正六年依頼予備役編入、中原家の家業を継がれた。和歌俳句に親しみ、また軍医学校在学当時校長であった森鷗外に私淑して、福知山連隊に勤務中、その地の新聞に短篇小説を掲載したことがあったそうである。しかし晩年は中也が文学を好むを嫌って、極力これを阻止せんとされた。年と共に青春の夢を失ったか、その毒を知って子のそれに当らざらんことを期されたか、そのいずれかであらう。

中原は中也という名前は鷗外につけて貰ったものだと称していた。当時旅順にあった謙助氏が手紙をもつてもとの校長に長男のために、名を乞うたということはあり得ないことではないが、母福さんは全然別の機縁を記憶しておられる。それは当時任地旅順の上官であった軍医大佐中村六也氏の名の頭と尾をとったというのである。中也鷗外命名説と比べて、これは遙かに現実的であり、かつ文字の由来が確実という強

味がある。<sup>(1)</sup>

中原にはちょっと伝説を作る趣味があった。それは彼の自己愛の子供らしい現われとも見られるし、彼はまたいつも自分が他人に誤解されると信じていたから、毒を制するに毒をもつてする風の韜晦の理由を持っていたかも知れない。例えば私は偶然中原氏が在原姓と共に古い家柄であることを知り、或る時彼に糺したところ、彼は諾いて二、三怪しげな歴史的な詳細を付け加えたが、その時の彼のいたずらそうな眼附からどうも怪しいと思っていたら、果してこれは出鱈目であった。中也の家がこの歴史的中原と何らかの關係があるのは全然不可能ではないが、現在彼の家に伝わっているところでは何ら積極的な根拠はない。

中也の家は元來湯田の西北二キロの吉敷村にあった毛利の閥族、通称吉敷毛利の臣である。中也の祖父の代はすでにその分家であるが、二人兄弟があった。兄助之は学を志し、家を弟政熊に譲って単身出京、刻苦して英語塾に学び、後横浜鉄道局に通訳として勤務したが、明治十九年病を得て三十七歳で没した。中原の母福さんはその一人娘である。

政熊氏は後中原家の現在地に移って医を開業した。子がなかったので兄の遺児福さんを養い、更に謙助氏の才幹を見込んで婿養子とした。こうして中也の幼時には家に二人の祖母があった。即ち福さんの生母スエさんと政熊氏の妻こまさん